

生涯学習情報「らいふまっぷ」別冊
家庭教育・子育て支援情報

性教育のお話

～思春期の子どもを持つ親へ～

松田敦子

(中標津町生涯学習委員・中標津高校養護教諭・セシア発起人)

中標津町教育委員会

目 次

1 はじめに	・・・	3
2 「家庭での性教育のポイント」と「子どもの接し方」	・・・	4
3 「思春期の特徴」を知っておきましょう	・・・	7
4 親（保護者）と「思春期の女の子」とのつき合い方	・・・	11
5 親（保護者）と「思春期の男の子」とのつき合い方	・・・	13
6 子どもが思春期を迎えた後の親子関係や夫婦関係について	・・・	15

生涯学習情報「らいふまっぷ」（平成16年12月号～平成17年5月号）に6回掲載したものに加筆訂正いたしました。

参考文献 「子と親の性の辞典」（釧路市役所発行）

1 はじめに

“性”のお話をする前に・・・

“性”ということばを聞いて何を思い浮かべますか？

「性（セックス）＝性交」ではありませんか？

セックスといえば、すぐに下半身を想像したり、性交や、いやらしいことを考えてしまう人がいるかもしれません。「性（セックス）＝性交」ではないということを、まず知って欲しいのです。

性（セックス）は頭の中、つまり、心に存在するものです。

“性交”ということばにこだわらないで、人間の生活や人間関係、どんな男として、どんな女として生きていくべきかなど<人としてどう生きるか>という視点で考えること。これを「セクシュアリティ」と言います。

また、性教育ということばから、どんな教育だと思いますか？

性器や性交について教える教育と思っていませんか？

世間ではいまだに、性教育をすることは“寝た子を起こすことだ！”と考えている人もいます。

そう考える人は、“性器や性交について教える教育”と思っているのではないのでしょうか。

性を学ぶということは・・・

人間として生きて行くための基礎づくりです。

正しい性知識、性情報を持たないまま安易な性行動をとることは、ブレーキが故障した車をシートベルトもせず、猛スピードで無免許運転するようなものです。

自分の人生です。**安全と安心**を得るためには学習が必要です！

正しい性知識、正しい性情報を持たなければ、しっかりした判断力はつきません。危険な性行動を避けることもできません。

「自分はどのように生きて行くか」を自分自身で決定していくためにも、そして、「自分を大切に人を大切に、からだを大切に」と思える**自分づくり、人づくり**が性を学ぶということです。

「自分が子どもの頃は性教育なんてなかった！ そんなこと、わざわざ教えなくても自然に分かることだ！ 実際、自分は今立派に家庭を持ち、子どもを育てているんだから！」と思っている方もいるのではないのでしょうか？

時代は流れ、社会は変化し続けています。アダルトビデオ、雑誌、インターネットなどなど、いたずらに興味関心を持たせるために、商品としての性情報はたくみに作られ、子どもばかりか、大人たちまでも、まんまと乗せられています。

だからこそ、正しい性知識、性情報を持たせる教育が必要だと思うのです。

前置きが長くなってしまいました。でも大切なことですから……。

2 「家庭での性教育のポイント」と「子どもとの接し方」

ポイント1

子ども自身が「親に認められている・親に愛されている」と感じられる接し方をしましょう

子どもたちは「愛されたい・価値ある人間だと認めてもらいたい・必要とされたい」と思っています。

親が、いくら子どものことを「思っている・認めている」と考えていても、子どもにそのことが伝わなければ意味がありません。

子どもが「愛されている」と感じるためには「話を聴くこと」です。

思春期に限らず、小学校から高校時代の親子の関わりは、「言葉を交わすこと・聞き上手になること」です。

子どもの言うことをじっくり聴いてあげましょう。

時には、つじつまの合わないことを言ったり、生意気なことを言ったりするかもしれませんが、まずは子どもの話に耳を傾けてください。

こんな心当たりはありませんか

忙しさにかまけて、ろくに子どもの顔も見ず、何かしながら話を聞いている。

子どもが話しを始めたらずくに口を挟んでしまい、ついつい批判めいた言葉を返してしまう

はぐらかしたり、ごまかしたり、うそをついたり、叱ったり・・・

聞き流したり、皮肉ったり、腰を折ったり、茶化したり・・・

この際だからと説教したり、自分の価値観を押し付けたり・・・

子どもにとっては、「もうウンザリ！もういい！言ったって無駄だ！」と口を閉ざす。
そうならないために・・・

顔を見ながら心を込めて子どもの話を聴いてください。
どんなにつまらないと思うことでも真剣に聴いてください。
その中に真実が含まれていることがよくあります。
話をしているときの身振り手振りにも注目してください。
言葉よりも表情やしぐさに普段との違いや心の変化などのメッセージがたくさん詰まっています。
相手の言葉に共感する事も大切です。
子どもの言動や行動に同調することではありません。
うれしいことがあったのか、悲しい事があったのか、辛かったのか、感じてあげてください。
忙しくて時間がないときは、時間を区切って話をさせる時間を作ってください。
「子どもと向き合う」とは、文字通り「子どもと向き合っ＝話を聴くよ」という姿勢です。
親が子どもを愛することで（愛されていると実感することで）自分を認めてもらえた！自分は生きていていいんだ！という自己肯定の意識が生まれます。
自己肯定の意識が生まれると、自分が大切な存在であることが分かり、他人もまた大切な存在であることが分かり始めます。
ここから相手を大切にしようという思いやりの心が育ちます。
自分を大切だと思えない人が、他人を大切にしようと思えるはずがありません。

ポイント2

「親は子どもを正しい方向へ導かなければならない」「親は子どもを正しく教えなければならぬ」という姿勢を強く持ちすぎると、逆効果になることがあります。

親はどうしても子どもを正そう、親が正しい方向へ導かなければ・・・と考え勝ちですが、まず、子どもがすべて言い終わるまで聴いてください。
その後、そのことに対して無理に親の思う方向へ正すのではなく、親の体験や知り得た情報を話すだけにしましょう。
また、教え込もうとしないで、あくまでも情報提供や気付かせる話しをしましょう。
決して誘導・強制を相手に感じさせる言い方はしないようにしましょう。
「親の考え方を子どもに押し付ける」ことでは、かえって反発を招くことになってしまいます。

ポイント3

子どもが自分でいろいろ話す中で、子ども自身が気をつけていけるような「情報の提供や場の設定」に努めましょう。

親も正しい知識や情報を持つために勉強することが大切です。

ポイント4

親は、「してあげる育児」から「忍耐の育児」という意識に変えていきましょう。

思春期は、肉体的には月経や精通を経験し、大人に近づきますが、心はまだ未熟で体の変化についていけず、依存と自立の間を揺れ動いています。

甘えたり、反抗したり、素直だったり、攻撃したり、この間を行ったり来たりして自立へ向かっていきます。

親からすると、「理屈ばかり言って」と思うことが多くなり、心の中に自我意識ができあがります。「自分探し」の時期です。

「自分探し」は、子ども自身の自我形成のために、大切なことです。

「自分探し」に対して、親ができることは

欠点を含めて、あるがままの姿を、暖かい目でみて、全面的に受け入れる

子どもの良い面を見つけてほめてあげる

わずかな進歩でも、あったら、それをはっきり口に出して評価する

一方的にガミガミと叱ったり、命令しない

自分の思いどおりにしようとしな

欠点を見つけられる心配がなければ、子どもは安心することができます。

安心することができればそこに自信も生まれます。

親は、子どもに命令するのではなく、情報を提供するようにし、判断は子どもにまかせるようにしましょう。まさしく忍耐です。

～この章で強調したかったこと～

「こどもの話を聴いてください」と何度も繰り返しました。でもそれは、何でもよしと受け入れることではありません。「ウン、ウン」とあいづちを打って聞いているだけということでもありません。子どものことばを、心を込めて聴き、それを信じることです。

「そんなきれいごとだけで子育てはできない！」そう思うのは当然です。

社会性（世の中のルール）を身につけさせることも親としての大事な役目ですから、禁止したり指示することは「しつけ」として必要なことです。

でもそれは人に言われるまでもなく、やっていることでしょう。

「こどもの話を最後まで聴いて・・・」とか「教え込もうとしないで・・・」は、

それを意識して心がけていたとしても、半分できて上々でしょう。
だからこそ強調したいのです。

思春期の子どもに限らず、自分の話を聴いてくれない人（自分を理解しようとしていない人）の言うことに耳を傾けるでしょうか。

3 「思春期の特徴」を知っておきましょう

～子どもたちは、性の成熟に伴ってどんどん変化していきます～

「性の成熟による変化」は、「思春期の特徴」です。

「異性に対して関心が高まりはじめ、性について強く意識する」ようになります。

ポイント1

「自分が、男であり、女であること」を強く意識するようになります。
他人、特に「異性の目」を気にするようになります。

「おしゃれ」に気を使うようになります。

「おしゃれ」は、「異性への関心が芽生えてきた現われ」であると同時に、「自分を目立たせたい」という気持ちの現われでもあります。

中学生の頃は、「目立ちたい」という気持ちと全く正反対に、「目立ちたくないが、自分だけが取り残されたくない」という両方の気持ちを持っているので、みんなと同じような服装をしたり、同じものを持ったりすると安心するようです。

ポイント2

「恥ずかしさ」の自覚

思春期は、「変化の激しい時期」であるため、体つきが不安定で気分そのものも安定していません。

たとえば、街を歩いている、バスに乗っている、「いつも誰かが自分を見ていないか、自分を笑っていないか」と感じてしまい、非常に恥ずかしく思うことがあります。

ポイント3

異性に関心が向く（男女交際）

(1)「異性に性的興味や関心がわく」って、どんなこと？

思春期になって「月経」や「精通」が始まると、本人が意識する意識しないに関わらず、異性に関心が生じ、性的な触れ合いの対象を異性に求めるようになります。

しかし、関心を持っていながら反発し、同性同士で集団をつくりますが、異性を全く拒否しているわけではありません。

中学生から高校生になるころには異性に対する抵抗感や不安もだんだん薄らぎ、異性への関心が一層高まります。

(2) いろいろな愛のかたちや、性同一性障害などについて

～性的指向～

恋愛の対象がどちらに向くか（性的興味、関心、魅力などを感じる性別がどこに向くか）ということをも「性的指向」といいます。

男性が女性に、女性が男性に性的指向が向けば「異性愛」。男性が男性に、女性が女性に向けば「同性愛」。男女両方に向けば「両性愛」です。

でも、異性愛が当然と思われている社会の中では、なかなか本当のことを言えなかったり、異性愛のふりをせざるをえなかったりします。

「普通」ということばはどのような意味でしょう。10年前には携帯電話を持っている人は「特別」な人でしたが、今は持っているのが「普通」です。

多くの人々がしていることが「普通」だと思われまます。「常識」ということばもそうです。それが正しいのか否かは別問題のようです。

時代とともに常識や通例も変わってきています。植え付けられた「既成概念」を考え直すことも必要なのではないのでしょうか。

～性同一性障害～

「こころとからだの性別の不一致」に悩むことを「性同一性障害」といいます。

思春期は、「からだの性」と「こころの性」の違和感に悩み始める時期です。

女の子の場合、乳房のふくらみをいやがり、生理に嫌悪を覚え、排尿の時に座るのをいやがるが多く、スカートを嫌がります。

男の子の場合、ペニスの発育にともない、身体の性との違和感に悩みが大きくなり始める時期でもあります。

～お子さんが「性同一性障害」ではないか？と感じたとき～

一番やってはダメなことは、「おまえの育て方が悪い」というような責任のなすり合いです。

誰のせいでもないのです。そもそも両親のせいでは決してないのです。

これまで自分でも気付かなかった「他の人との違い」を自覚したとき、自分自身も混乱し、悩みます。ですから、誰をも責めてはいけません。

両親（保護者）がこの問題に偏見を持っていては、何もうまく運ぶことはありません。

色々な本やビデオが発売されています。まず、性同一性障害について知ることが必要だと思います。

「どのような性であろうが私の子どもに変わりはない。あなたは、ありのままの自分でいいんだよ。あなた自身のところと体は、あなただけのかげがえのないものなんだよ。」と親（保護者）に受け入れられたとき、思春期に揺らいで苦しんでいたところが、安心と喜びに変わり、「自分は認めてもらえた！自分は生きていいんだよ！」という“自己肯定の意識”が湧き上がり、人間として成長していくのではないのでしょうか。

(3)「男女交際」について

思春期は「性の成熟化」が進み、性的欲求がどんどん旺盛になっていく時期です。このような時期に、男女交際をやみくもに禁止することは、親子の間に秘密ができることになり、何か困ったときに親には相談できない状況を作り出します。それより、素敵な異性との交流によって気持ちが落ち着き、「その人に魅力的でありたい、その人に好かれたい」との思いが、かえって色々な面で子どもの向上につながると考えた方が良いでしょう。

その場合、「親としての心配ごと」はきちんと告げておきましょう。

たとえば「勉強がおろそかになったりしないか」「相手を傷つけることはないか」などです。

特に大切なことは、「性交」が「お互いのところや身体にどんな影響を及ぼすのか」「二人にとってこれからの人生にどんな影響を及ぼすか」などについて、子どもとしっかり話し合い、正しい情報を子どもに与えなければなりません。

(4) 男女交際で、二人の関係を充実したものにするためには？

最も大切なことは、「男女が対等の立場で付き合う」ことです。

行動は、しっかり自分の意思で決定しましょう。

つまり、相手の意見や要求などに対して「イエス・ノー」をはっきり表現しましょう。

何か行動するときには、「自分でよく考え、しっかり判断し、自分の意思で行動する」必要があります。

「自分が自分らしく、自主的に自信を持って生きる」ためには、自分の意思で判断し、だめなことにはしっかり「ノー」と言える力と勇気を持たなければなりません。

・・・まとめ・・・

「自分を大切にする」ということは「イエス」・「ノー」をはっきり言えることです。
「自分を大事にできない人」は、「他人を大事に、大切に、そして愛すること」を上手にできないのではないかと思います。
「保護者」として「親」として、「人生の先輩」として、次のようなことがらを子どもたちに伝えられたら、思春期とともにどんどん成長し、大人になっていく子どもと、とってもステキな関係を続けていけるのではないのでしょうか。

「自分のすること・したこと」は、自分でしっかり責任を取りましょう。

子どもが、苦しみ、困ったときは、保護者といつでも相談できる信頼関係をつくりあげていきましょう。

「自分の意志で行動」したなら、「自分で責任を取る」のは当然です。

「どんな行動をとるか、どんな交際をするか」を心にしっかり持って、結果については「自分ひとりで責任をとり、自分の力で処理しなければならない覚悟と用意」が必要です。「本当に頼れるのは、自分だけであること」の強い自覚を持つことが大切なことになります。

でも、私たちは、「間違いや失敗や過ち」を犯します。自分だけで何とかしようとして解決できず、逆に悪い方向に向かうこともあります。

「思春期をむかえ、どんどん大人になっていこうとしている子ども」に対し、子どもが本当に困ったときは、「親・保護者といつでもなんでも話し、相談できる関係」を持っておくことが、一番大切なことだと思います。

思いやりのある行動をとりましょう。

「思いやり」とは、「相手の立場になって考え、相手の気持ちに寄り添うこと」だと思います。

「思いやりのある行動」とは、「常に相手のことを考え、相手の嫌がることはしない。相手に不快感や不安を与えない」ことです。

「どうして欲しいのか、何をして欲しくないのか」というような自分の思いをはっきり言葉に出して話すことです。

「相手の気持ち」は、聴かなければわかりません。こころから、一生懸命聞きましょう。聴かなければ、そして話さなければお互いの誤解が増えるばかりです。

金銭面でも対等の立場をとりましょう

二人のあいだで、片方がいつもお金を払う関係では、必ずそこに、「支配するものと支配されるものの関係」を作り出すことになります。

「健全なお互いの関係」を長続きさせるためには、「金銭的な従属関係」をつくらないことがとても大切なことです。

～本当に困り果てたときに相談しようと思ってもらえるような親でありたい～
性的欲求がどんどん旺盛になっていく時期ですから、「性交」、そして「望まない妊娠」もありうるわけです。

気付いたときには、人工中絶が可能な時期を過ぎていたとか、生まれる寸前だったということもあります。

どうして気付かなかったのかと言われます。無理です。悩んでいる間は隠しますから、隠している間というのはわかりません。

「本当に困ったことがあったら助けるよ」「これから先、生きていく上で辛いことも色々あるだろうと思うが、そのときには相談相手がいるよ。親（保護者）なんだから、あなたにどんなことがあっても助けてやりたいと思うし、一緒に考えることができると思う。ここに相談相手がいるということだけは忘れないで」というメッセージを子どもに送り続けてほしいと思います。

4 親（保護者）と「思春期の女の子」とのつき合い方

家族構成も、「母子家庭、父子家庭、祖父母家庭、多世代家庭、親戚同居家庭」など様々な形態にあるのが私たちの社会です。

このように「多様な家庭や家族」の存在を認識した上で、特に「母親と父親が果たす役割の特質」について述べてみたいと思います。

(1) 女の子と母親

娘の発育を担うのは、母親の役割が大きいといわれています。

母親は、同性の一番の先輩ですから、初経や月経などの不安や悩みについて話し合うことは容易ですし、このことは娘と母親の絆を一層強めることになります。

また、「性の問題はプライベート」のことですから、「性に対する子ども自身の様々な問題や悩みや意識などについて、いつでも話しあえる信頼関係、いつでも相談しやすいような雰囲気」を親子の間で作っておくことも大切です。

女の子も思春期になれば異性に関心を持つようになります。

例えば、「主体的な女性というものはどういう女性なのか」を話題にできたらいいですね。

ボーイフレンドができ、恋人ができ、デートがあっても、「自分の身体は自分のもの・自分の性器も自分のもの・男のものではない・男に言われて断れない女になるな・自分が本当にそうしようと思ったときだけ性の表現は認められるのだ」ということを話し合えたら、すばらしい性教育になると思います。むしろ、思春期の早期に、ぜひ語っていただきたいと思います。

「男に依存しない・支配されない」という、「一人の人間としての女性として、主体的な性意識を持って生きていく」というテーマも、とても重要な話題です。

(2) 女の子と父親

思春期に入りますと、女の子にとって父親は「おとなの男」という性的存在として映り始めます。

思春期の女の子は、ある日突然父親から離れたり、また、触られるのをとてもいやがるようになったりします。

女の子のこのような性的な成長を感じ取ったとき、父親は一步退くのがよいでしょう。

父親は、娘にとってもっとも身近な「大人の男性」なので、妻との関係も含めて「素敵な男性の一面」を見せてあげましょう。

子どもは、基本的には、親の人生のパートナーではありません。父親のパートナーは母親であり、母親のパートナーは父親です。

父親は、このようにしてだんだんと女の子と離れていくわけですが、子どもの思春期の到来を認識したとき、あらためて、母親である妻との関係を大切にすることが、家族関係を維持する上で、重要になってきます。

父親は、女の子が性的にだんだんと成熟してくると、心落ち着きなくそわそわしたり、必要以上の心配を心に抱えてしまう人が多いといわれています。

とても寂しくて、悲しくて、時には苦しみさえ伴うかもしれませんが、父親は一步退いて、思春期の女の子の対応の多くを、母親に任せてみることも大切なことでしょう。

母親が事情により不在の場合

母親に代わる年長の女性に、母親の役割をになってもらうようにできれば理想ですね。例えば、親戚のおばさん、近所の親しいおばさん、恩師、友達のお母さんやお姉さんなどです。

時々、話し相手になったりして、リラックスした時間を作りたいものです。

そんな日常の交流が、「あなたが困った時には、ここに相談相手がいるよ」というメッセージになり、安心感を持つようになります。

相談にどう対応しようかと身構える必要はありません。「ああしなさい、こうしな

さい」ではなく、「私はこういう意見を持っているよ」「こんなふう生きてほしいな」とか、自分の考えを子どもにぶつけることが大切ではないかと思えます。

5 親（保護者）と「思春期の男の子」とのつき合い方

(1) 男の子と母親

男の子は、思春期に入る前までは、「僕はお母さんと一緒の人間だ」と思い込んでしまうほど、母親の暖かいふところの中で育ちます。

そして思春期を迎え、精通を経験すると、母親を次第に「自分の一番身近にいる成熟した女性」として感じてくるといわれています。

また、多くの男の子にとって、「母親は理想の女性」であるともいわれています。「男の子が男性としての性を確立していく」には、「母親の支配から脱出すること、母親の性の影響を乗り越えること」が大切です。

父親は、「息子と母親の強く結ばれた絆を断ち切る役目」を果たさなければなりません。

断ち切るには、「夫婦の絆を強めて、息子の立ち入る余地を残さない」ことです。これをしっかり断ち切れないと、俗にいう「マザーコンプレックスの男性」ができるといわれています。

また、精通は、男の子にとっては、全くプライベートなことです。

男の子にとって、「母親はもっとも身近にいる成熟した女性」ですから、その母親に「自分の性的秘密(夢精の後始末やマスターベーションなど)」を見られるのは、非常に恥ずかしいことに思うようです。

掃除・洗濯・炊事など、「身の回りの生活のしつけや役割を男子にも女子にもしっかり教え込むこと」がとても大切なことはいまでもありません。

夢精で汚れたパンツなども自分で洗濯することができますし、自分でやらせるほうがよいでしょう。

また、マスターベーションには、気づかないふりをしてあげるほうがよいでしょう。

「同性のこどもには、同性の親がかかわっていく」ことが原則といわれています。

一般に、母親は、思春期を迎えた男の子にはあまり近づかないほうがよいと言われていています。しかし、まだ、子どもの部分が多いので、生活の基本的な部分の面倒は見てあげる必要があります。

男の子が、言葉少なで不機嫌そうになり「もう僕にはあまり近づかないで・ほっといて・あまり干渉しないで」という素振りを見せ始めたら、男の子の親離れの時期と思ってください。

母親の役割は、いわゆる「お説教役」から「聴き役」に切り替えましょう。息子が何となくおしゃべりしたそうに傍らに寄ってきたら、「学校のこと・先生のこと・友達のこと・愚痴など」どんなことでもウンウン聞いてあげましょう。

(2) 男の子と父親

一般に「母親にとって思春期に入った男の子の気持ちを理解すること」は、なかなかむずかしいと言われてしています。

思春期は、「性の問題」が「身体や心や自意識や価値観の問題」として広がって行き、「子どもから大人としての一個の人間に変わっていく時期」です。

例えば、父親は母親に対し、思春期に入った男の子のことについて、「息子の面倒は自分が見るので、何かあってもだまって見守っていてほしい」と進言するぐらいの積極性があってもいいと思います。

子育ての難関は「思春期が始まってからの数年間」であると言われてしています。

思春期は、子どもによって千差万別ですが、「早い子で小学校高学年」から、「多くは中学生から高校生」の年代にやってきます。

「学校のこと、先生・友達のこと」など、「子どもの不安や愚痴や戸惑い」を聴いてあげましょう。とにかく、「聴き役に徹すること」が思春期の子どもに対するキーポイントです。

そうすることで、子どもは一人前に扱われていることに喜びを感じ、大人になることをイメージするようになります。

女性との関係も、「男性としての責任・思いやりの心・自己決定能力・セックスのこと（女性を妊娠させる力があること）」などをしっかり自覚させ、「自分の性行動に対するコントロールや自制」ということを男の子に話し、理解をさせていくのは父親の役目と認識したほうがよいと思います。

父親が事情により不在の場合

父親に代わる年長の男性に、父親の役割を担ってもらうようにできれば理想ですね。

例えば、親戚のおじさん、近所の知り合いのおじさん、恩師、友達のお父さんやお兄さんなどです。

時々、おしゃべりしたり、ドライブしたりする時間をつくるようにしたいものです。

そんな先輩を持つことで、男の子は「大人の男性のイメージ」を自分の心の中に持ち、「自分は受け入れられているんだ、自分は守られているんだ」という安心感を持つようになります。

～プライバシーの尊重～

電話相談等で多いのは、“マスターベーションをしているところを誰かに見られた”というもので、相手のトップは母親だそうです。

見られたらどうなるか・・・「自殺したくなった」「家出したくなった」「親の顔なんか見るのもいやになった」という訴えです。

なぜ見るのかというと・・・日本の家庭独特の、「家族間のプライバシー意識の欠如」と、「子どもの人格を認めるという点での親の意識の乏しさ」だともいわれています。

見たきっかけは・・・「ちゃんと勉強しているかな？」と、そーっと近づいて、いきなりガラッとドアを開けるというやつです。

他にも、親が子どものプライバシーを侵害している行為として、「子どもがいない間に部屋に忍び込んでゴソゴソ探し回る」「日記を読む」「携帯電話のメールを盗み見る」

そういう行為を受けた子どもの側がどれだけ傷つくかを知っておく必要があります。

大切なのは、“親は子どものすべてを知っているわけではない”“子どもは親に秘密を持つものだ”ということを知っていくことだと思います。

思春期というのは、親離れ、自立の過程です。秘密を持つことが当然だということを知り、親自身が認識しなければいけないのではないのでしょうか。

6 子どもが思春期を迎えた後の親子関係や夫婦関係について

(1) 親子関係について

思春期の子どもたちとは、できるだけ早く親離れしたほうが、よい結果を招くようです。

「親から離れた子どもたち」も、思春期を過ぎて大人に近づくと、再び、異性の子どもは異性の親に近づいてきます。

女の子の方が、性的成長が男の子より早いので、高校生も後半になるとお父さんに優しくなったりします。例えば、晩酌のつまみをつくったり、話し相手をしてくれたり.....。

男の子は、女の子に比べてちょっと遅いようですが、20歳になったり、就職したりすると、お母さんに優しくなります。

そのころには、もう娘にとっては、お父さんは男ではなく、また、息子にとっては、お母さんは女ではなくなります。つまり、「ちょっとくたびれたおじさんとおばさん」となるわけです。

「子どもが親に負けてしまうこと」、例えば「母親が大きな期待を子どもに持って育て、その通りに子どもが成長したとき」など、子どもの思春期のトラブル（摂食障害）が生じたりすることが多くあります。

また、その逆の場合として「子どもが親に勝って（期待にそえないで）親離れをする」と、母親の方に更年期のトラブル（更年期障害がひどくなったり、うつ症状の発生など）が生じたりすることがあります。

～親離れ・子離れのポイント～

「親離れ・子離れをスムーズにする」ためには、子どもに対する期待などにバランスを持つことが大切といわれ、例えば、子どもに対して多大な期待をかけすぎるとは「スムーズな親離れ・子離れ」を阻害する大きな要因のひとつになるようです。

(2) 夫婦関係について

子どもが思春期を迎え、大人に変わっていくとともに、親も変わっていくことが大切です。

つまり、子どもの思春期の到来は、「夫婦関係の再認識や再構築など」と重要な係わりを持つということです。

それは、「子ども中心の生活から、夫婦中心の生活に切り替えていく」ことです。だんだんと「子どもの問題を中心とした生活」から、「夫婦の問題を中心とした生活」に切り替えて、「子どもに対する親の役割」を少しずつ減らしていきましょう。

つまり、「子どもに対する親という役割」を減らしていきながら、改めて、「女として、妻として、夫として、一人の人間としてどう生きたらいいか」を考え、親自身を変えていくことです。

お互いにやりたいことを認め合い、「子どもに対する親の役割」以外の様々なことに、広く興味を持ちましょう。

これからの人生について、さらに一人の人間として住む世界を広げ、好奇心を持って色々なことに挑戦し、例えば「おしゃれ」にも気を使い、生活の中で会話と笑いを大切にしましょう。

子どもと一緒に親も社会も成長していく。素敵なことですね。

おわりに

6回にわたって、「思春期の子どもを持つ親へ」をテーマに、性教育のお話をさせていただきました。思春期までの子どもへの愛は「ふれあうこと」だとしたら、思春期以降の子どもへの愛は「聴くこと」ではないでしょうか。

子どもの言うことにしっかり耳をかたむけて、共感したり、自分の感じていることを伝えたりする。そのためにも、子どもが話しやすいように「こちらの懐（ふところ）の広さを示していくこと」が大事なことだと思います。

「子どもが親に話さなくなる」ということの背景には「疑われた」とか、「親に話すと文句を言われる」という経緯があるようです。

「言うは易く、行ふは難し」ですが、私自身も肝に銘じて、これからも地域の皆様方と協力し、助け合いながら、未来を担う子どもたちの健やかな成長のために微力ながら努めていきたいと思っています。

生涯学習情報「らいふまっぷ」別冊

家庭教育・子育て支援情報

「性教育のお話 ～思春期の子どもを持つ親へ～」

平成18年4月発行

編集・発行 / 中標津町教育委員会（生涯学習課生涯学習指導班）

〒086 - 1197 中標津町丸山2丁目22番地

0153 - 73 - 3111（内線276）

FAX 0153 - 72 - 7757